

平成30年4月25日、景観について職員と意見交換をした際の市長の話を紹介します。

白い街

昭和42年、石原裕次郎さんが歌う「白い街」がヒットしました。サビの部分のフレーズのおかげで、その当時、名古屋はコンクリートで覆われた街というイメージが定着してしまいました。

今、名古屋市内の広小路通や桜通を車で走ると、街路樹の立派な大きさに驚きます。栄の久屋大通公園には、緑があふれています。春には、木々が一斉に芽吹き、秋には紅葉し、ハラハラと落葉する様子は、とても美しいと感じます。

名古屋市のホームページ「なごやの街路樹の歴史」を見てみると、昭和30年代以降、トウカエデやアオギリなど、早く大きくなる種類を中心に都市緑化を進め、昭和50年代以降は、ハナミズキなど花の咲く種類の街路樹を多く植えてきたそうです。

私は、昭和30年代後半、名古屋中心部のあちらこちらで街路樹を植える工事が行われていた光景を覚えています。石原裕次郎さんが「白い街」を歌った当時、街路樹はまだまだ小さいものでしたが、あれから50年が経った今、名古屋を「白い街」と思う人は少ないでしょう。街路樹が大きく育ち、私達の目を楽しませ、癒してくれるまでに成長するには長い時間がかかります。大きな木を育てる時間の積み重ねが、まちの歴史につながっていると私は思います。

先日、東京に出張した際、東京駅の丸の内、八重洲ともに、新たに大きな木が植えられているのを見ました。大きな木があることで、無機質なビル群が潤いのある空間になっていました。大きな木の植樹は、とても難しいと言われます。私は、「江戸時代からの高度な技術が引き継がれているのかな」と思いながら、その景色を写真に収めてきました。

歩いて楽しいまちに

数年前、本市も加入する健康都市連合日本支部大会で千葉県流山市が、健康都市実現に向けた取組として「まちなか森づくりプロジェクト」という公共施設や道路用地などのちょっとしたスペースに植栽を行い、まちの中にみどりをつくる取組を発表され、私は驚きました。なぜ、驚いたかということ、それまで健康都市実現に向けての取組は、生活習慣病予防や身体活動・ウォーキング推進など、健康と直接結び付く取組がほとんどであり、「まちにみどりをつくる」という、一見、直接的に健康とは結びつかない視点からの発表を初めて聞いたからです。

健康のためには、歩くことが必要です。しかし、夏の暑い日、木陰もないところを歩けません。木陰を生む大きな街路樹があることで、歩くことが楽しいまちになるのです。

～市長の話を聞いて～

ここ最近、私は、車で出かけると、街路樹が気になります。そうした目で見ていると、長久手市内の道路脇の低木の植栽が、他の自治体に比べてとてもきれいに剪定されていること、名古屋市内のような大きな街路樹は少ないことに気付きます。また、近所を散歩していると、古くからの家の生け垣や庭木が、その周辺の潤いになっていて、「この家の、この大きな木がなかったら、この付近は殺風景だろうなあ。有難いことだなあ」と思うようになりました。

普段、何気なく見ている景色も、意識をちょっと、みどりに向けてみると、違って見えてくるので楽しいものだなあと思います。